

スポーツ研究センターニュースレター

「新型コロナウイルスの行方」

スポーツ研究センター長 辰本 頼 弘



2020年2月に、横浜港に入港したダイヤモンドプリンセス号から新型コロナウイルスの感染者が確認され、連日テレビニュースや新聞等での報道がありました。不謹慎ながら、その頃はボーッと眺めて、大変だなあと感じていた程度で、ここまでおおごとになるとは全く思ってもいませんでした。その後の新型コロナウイルス感染の猛威は改めて文章にすることもないのですが、日本のみならず世界規模での経済・社会に与えた影響はとてつもなく大きく、まだまだ感染者や死者の報告が止まりません。

このウイルスの影響で、もちろんスポーツ界も大変な影響を受け、2020年7月下旬から8月上旬に開催予定だった東京オリンピック・パラリンピックも1年延期となり、その他各種様々なスポーツ活動に制限がかかり中止や延期が発表されました。このように世界規模の大会から市民レベルの大会まで影響を及ぼしたということは、それに携わるすべての人々のスポーツ活動が停止したことになります。戸外や体育館での活動が出来ない分、自宅でトレーニングをするアスリートの様子をYouTubeで流し、それを真似てトレーニングをされた方も多かったのではないのでしょうか？

私が勤務している大学でも、もちろん学生のスポーツ活動は停止となり、オンラインでのミーティングや自宅でのトレーニング報告等、本来のスポーツ活動からかけ離れた取り組みを余儀なくされ、苦勞されたクラブ運営となっています。

現在、プロスポーツをはじめ、いろいろなスポーツ団体が感染対策に万全を期し、スポーツ活動が実施されつつあります。ただ、まだまだ本格的とはいかず、飛沫感染防止のためにスポーツに付き物の声を出してのプレーの制限や応援で声を張り上げることは禁止されており、スポーツをする者、スポーツを見る者にとっても存分でない活動となっています。

ワクチンの接種もこれから進むようで、早く新型コロナウイルスの収束(終息)が見られ、気迫溢れるプレーと思い切りの笑顔が表出される日を心待ちにしたいと思います。

1年間延期になった東京オリンピック・パラリンピック。開催に期待をしたいものです。



飛び出せ世界へ！

がんばる追大アスリート
第7回

李鉄足球俱樂部 コーチ（湘南ベルマーレより派遣）

大澤 令さん（社会学部2020年3月卒業）

■追手門学院大学へ入学した理由を教えてください。

高校の時に所属していたAS.ランジャ京都の会長が追手門学院大学でも教授をされており、その方の元で学びたいと思い追手門学院大学に入学しました。

■サッカー部での4年間を振り返っていかがでしたか。

4年間、大学リーグでの公式戦出場はなく、プレーヤーとしては満足できるものは残せなかったのですが、色々な指導者の方々との出会いを頂き、クラブで得たものは大きかったと思います。また、強化クラブのため、大学や学生の代表者として指定されたGPAを超えないと公式戦に出場できないなどのルールを守ることは、サッカー、スポーツだけやっていたら良いのではなく、社会人となる準備なのだということを学びました。

■いつから指導者を目指そうと思っていたのですか。

大学3回生の後半です。まずは指導の経験を積む必要があると考え、高校時のクラブチームで実際に小学生の指導の経験をさせて頂きました。改めて指導者としてプロコーチの方からアドバイスを頂いたりして、自分の指導力向上に努めました。また、色々な方々の話を聞きに行きました。多くはゼミの研究室に来られた企業の方などとの飲み会に同席させて頂いた時に新たな環境を紹介して頂き、実際に足を運びました。



■現在は中国で指導をされていますが、その経緯を教えてください。

卒業した2020年3月から湘南ベルマーレとプロコーチ契約を結びました。本来は4月から同クラブのマニラ校で指導担当の予定でしたが、新型コロナウイルスの影響でフィリピンへの渡航許可がおりず、しばらく湘南で指導をしていました。元々、海外で指導をしたいという思いがあったので、ゼネラルマネージャーや社長に交渉をしたところ、中国の李鉄足球俱樂部（代表の李鉄氏は元中国国家代表のスーパースター）を紹介されました。現在、子ども達は総勢200名、スタッフ20名（近くの体育大学からインターンシップ生を受け入れたりしている）の中で小学1、2年生を担当しています。

■中国と日本との差と言うものを感じますか。

まず、日本での当たり前が当たり前ではないということを痛感しました。例えば、新型コロナウイルス対策です。中国はホテル2週間、自宅1週間の完全な隔離でしたが、帰国時の日本では自宅2週間の自主隔離でした。中国は国として、YESとNOがはっきりしています。監視カメラが街中に溢れ、常に監視されている点も日本との違いを感じます。

■指導の際の子どもたちの印象を教えてください。

プレーのレベルは日本の子ども達とそれほど変わりません。子どもながらに凄く勉強している印象があります。中国語がわからない私には全て英語で話しかけてきます。英語をもっと学んでおけばよかったと反省しきりです。英語で話しかけてくれているのにまともな英語で返せないというのはコーチとしても恥ずかしかったです。

■スポーツやサッカーに対する考え方の違いはありましたか。



全く違いました。中国では、小学3、4年生頃から学業かサッカーかの人生の選択を迫られます。学業を選んだ子ども達は、学校でサッカーができません。学校側も学業を優先しているため、クラブチームに行く子は白い目で見られます。それでもグラウンドに来る子ども達からプロになりたいという強い意志を感じます。サッカーの時間だけ学校を抜けて、練習が終わればまた学校に戻る子どももいます。その分、サッカーの時間が大切だという強い気持ちが伝わってきます。この点は日本の子ども達とは全く違います。

■指導者の指導の仕方や指導の考え方の違いは感じますか。

中国の指導者は指導に熱が無い人も多いです。練習が終わればフィードバックすることなく、直ぐに帰宅します。トレーニング内容も同様で、段階的な指導やテーマを持って行うことがありません。小学1年生に大人と同じ筋力トレーニングをさせ、日本のやり方は良いからとにかく真似するという印象を受けます。どの年代の、どの時期に、こういったやり方で、どのようなトレーニングをすれば良いのか、という知識は不足しているように感じます。これでは中国サッカー界の未来はないということで代表の李鉄さんは自らクラブを創って一石を投じようとしています。



■親御さんたちの違いはありますか。

これも日本とは全く違います。日本では、指導に理解のある方が多く、私の指導中に子どもたちに何かを言いに来ることはなかったのですが、中国の親御さんたちは、自分の子どもを絶対にプロにさせたいという思いが強く、子どものプレーに対して様々な指示を直接出します。私の指導のポイントと全く違う場合もあり、子ども達が混乱する場面がみられます。親御さんのサイドコーチングはしないで欲しい、という親御さんへの指導をしなければなりません。



■指導者になって、今では海外で子どもたちと接する中で、改めて気づいたことはありますか。

大学1回生からもっと授業を理解しておいたらよかったと改めて思いました。私は社会学部でしたので、授業内容がそのまま社会の理解に役立ち、他の視点から考えることで解決できたという場面も多かったです。出席のためだけに授業に出るのは凄くもったいないと思います。その授業にかかる時間やお金を無駄にせず、大学で得られる教養は全て自分のものにしていただいた方が良くと改めて思いました。

■今まで学んできたものが指導の中で実際に活かされているということですね。

特にゼミや卒論執筆で学んだ、思考の整理や論理性、先見性などは、指導の場面で活かされています。子どもの思考性からこのようなプレーが多くなる、などと整理して論理的な指導に結びついています。また、海外に出て活動する中で、海外が良い、悪い、日本が良い、悪いで判断するのではなく、多様性や多角的な視点を持って、お互いの文化や考え方を理解する学びが生かされていると思います。

■後輩の皆さんへのメッセージをいただけますか。

学生の中に、色々な社会人と出会って欲しいと思います。社会で生きる色々な方の考え方を吸収して欲しいと思います。人と人の繋がりは非常に大きな財産になります。私自身、人とのご縁があり、現在があります。そして、ただ人に会いに行くのではなく、自分自身を磨くことでさらに色々な人との出会いをつくって貰え、さらに繋がりが広がるということを大切にしたいです。

(2021年3月1日に実施。聞き手：スポーツ研究センター 上田 滋夢)



追手門学院大学地域スポーツ人材育成コンソーシアム活動報告

報告① WEBシンポジウム「プロサッカー選手を目指すためのひとつのヒント」

2020年12月9日から2021年1月8日まで、WEBシンポジウム「プロサッカー選手を目指すためのひとつのヒント」を配信しました。昨年から流行している新型コロナウイルス感染のためにオンラインでの開催となりました。ガンバ大阪ジュニアコーチ・大塚翔平氏、柴田英俊氏、関西福祉科学大学・津吉哲士氏（スポーツ栄養学）の3者と事前に視聴申込みをいただいた方からの質問を5つのパートに分け、それぞれの立場から回答してもらうという形式を導入するとともに、子どもたちにも簡単に取り組める実技実践のパートも挿入し約90分間の動画に編集しました。申し込みは96世帯あり期間中の視聴回数は147回で多くの方に視聴をいただきました。

小学生男子の「なりたい職業ランキング」では、サッカー選手が上位にランクされていることから、今回のシンポジウムで子ども自身のサッカーへの取り組みや技術のアップ、親御さんの子どもへの関わり等、少しでもサッカー上達への貢献が出来たら幸いであると考えています。また、女子のサッカーの競技人口も増えており、再び世界の頂点を目指すサッカーの魅力がどんどん広まっていくことを期待しています。

今回の視聴者の中から、未来の「サムライブルー」や「なでしこジャパン」が誕生することを楽しみにしています。
(報告：辰本 頼弘)



報告② 熱中症対策アドバイザーの取組報告（共催：大塚製薬）



- | | |
|---------|--------------------------------|
| 1. 日 時 | 2020年11月16日（月） 14：30～（約10分） |
| 2. 会 場 | 茨木市民体育館 |
| 3. 参加学生 | 3回生（女子）2名 |
| 4. 主 催 | スポーツ研究センター （共催：大塚製薬株式会社） |

健康体操に参加した高齢者を対象に、熱中症対策アドバイザーの資格を取得した学生2名による「熱中症対策」についてプレゼンを行いました。コロナ禍の中、感染対策を行いながら、一人ひとりの顔を見ながら、丁寧に発表ができていました。今回は追手門学院大学地域スポーツ人材育成コンソーシアムの取り組みの1つである、大塚製薬の熱中症アドバイザーの資格認定制度を利用し、またシンコースポーツより場の提供をして頂くなど、共同開催となりました。ここに至るまで、たくさんの指導や協力があって開催できたこと、感謝したいと思います。

参加学生の声

「とても緊張しましたが、人前に立って話すことの難しさや楽しさを学ぶことができ、大変貴重な経験をすることができました」

(報告：巽 樹理)



- 編集・発行 2021年3月31日
- 編集代表者 辰本 頼弘
- 発行所 追手門学院大学 スポーツ研究センター
〒567-8502 茨木市西安威2-1-15
TEL/072(641)9690 FAX/072(641)9695（事務局：学長室）
E-mail sports@otemon.ac.jp
<https://www.otemon.ac.jp/research/labo/csr.html>